

池田草庵と楠本端山(Ⅱ) : 幕末新朱王学の葛藤

望月, 高明
都城工業高等専門学校

<https://doi.org/10.15017/18208>

出版情報 : 中国哲学論集. 30, pp.42-76, 2004-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン :
権利関係 :

池田草庵と楠本端山(Ⅱ)

——幕末新朱王学の葛藤——

望 月 高 明

緒言

私は本年一月に明らかにした同題の小論(Ⅰ)¹において、楠本端山の池田草庵批判の文を取り来たつて、その批判の一擧がまことに手巖しいもので、例えていえば人の咽喉上に刀を著けるような概があつて、取りようによつては草庵の学の全体を否定するようなモメントを内包していることを指摘した。行論上、端山の草庵批判の文を提示しよう。

池田丈の「東崇一に復する書」も、亦た以て其の得力の一斑を窺うべし。胸懷脱洒、真に君子の人なり。但だ区々妄意するに、竊かに疑うべき者有り。聞く、丈の学姚江を慕うと。然れども其の言たる、外に馳驚^{ちぎ}奔走して、縝密釀郁の味に乏し。是れ其の故を知らざるなり。且つ其の読書を論ずる、頭緒甚だ多く、其の要領を得ざるに似たり。若し夫れ此くの如きの閑功夫を作せば、吾は恐る、終身勞擾して、吾が身の分内に寸益無からんことを。以て如何んと為す。『端山遺書』二、与吉甫論吉村景崧書、小論(Ⅰ)にならつて、以下この文を便宜上丁書簡と呼ぶ)

もつとも、丁書簡を成心なく読むならば、端山の批判が是を是とし、非を非とする底の、客觀的に公平な態度を持していることがわかる。ところで、丁書簡は便宜上、三節に分けることが可能である。すなわち、

一、草庵の「復東崇一書」の性格、及び端山が草庵の氣象を形容するに用いた「胸懷脱洒」という表現に伏在して

いる問題。

二、陽明学を奉じている草庵において、畢竟陽明学とは何かという、草庵の学性格規定に関する問題。

三、宋学は従前に増して「読書」の性格、あるいはその意義について独自の解釈的地平を開いたが、こうした思想的脈絡に照らしたとき、草庵の学において「読書」とはいかなる意義、いかなる地位を占めているかという問題。

ところで、二と三は、これをひとまず全体と部分の關係と見なすことができるであろう。二の解明はわれわれの全課題である。全課題という所以は、端山が草庵に突き付けたその問いは、それが真摯であればそれだけ、その勢位を高めて、しからば朱子学を宗とする端山自身において、畢竟朱子学とは何かという、弾力ある問いとして直ちに反転していかなければならない底のものであるから。そして、小論の副題が示しているように、草庵と端山の学性格の解明を通して、それを幕末新朱子学の葛藤起伏として把らえ、両者の間の乖離や葛藤、妥協や和解の試みを通して見えてくるものを叙述に上せようとするのが小論の主題である。そして、三はこの全課題へ近接するための最初の手掛かりとしての地位を担っている。このように互いに密接に關係する二と三については、われわれは稿を改めて解明するのである。従つて、二、三への準備として、本稿では一の解析がわれわれの当面の課題である。

一

しからば、端山が「その力量の一斑を窺うに足るもので、草庵は胸懷が洒脱で、真の君子人である」と賞讃を惜しまなかつた「復東崇一書」とは、いかなる性格の書簡なのであるうか。草庵の「復東崇一書」には、それに先行する東沢瀉（崇一はその字）の草庵に宛てた書簡が存する（沢瀉のそれは和牘で、今『陽明学者書簡集』四六三頁に収録する）。沢瀉はその中で、先年但馬に草庵を訪ね教誨にあづかつたのは、まことに暫時のことであつたが、実に生涯の学問の基本を究めたと、その高恩を謝している。沢瀉が生涯の学問の基本を究めたといつているのは、一場の社交辞令に止どまらない。事実、沢瀉が豁然として陽明学に悟入したのは、この年（万延一年）のことに属する。続け

て春日潜庵の近況をたずね、純まこと（沢瀉の名は正純）がこの先生（潜庵）と林良齋先生へ拝謁申し上げなかつたことは、まことに終身の遺憾であると、両者に対する仄々たる仰慕の念を吐露し、草庵に彼等との応酬の手紙などがあつたら割愛願いたいと依頼している。草庵の「復東崇一書」は、沢瀉の問い合わせにわざわざ漢牘で答えたもので、それだけにその内容はまことに懇切をきわめている。このことは、例えば沢瀉の次の言が物語っている。

春日先生于^レ今御幽蟄^{ちゆう}少も復不^レ申由、実二年^レ不^レ及如何之事哉と奉^レ存候。就而ハ先生御情懷之義御漢牘ニ而小子
え御復書被^レ賜、誠ニ千万難^レ有奉^レ存候。大ニ昏惰之氣ヲ奮興仕候様覚候。御深愛之程何日忘^レ之。〔陽明学者書
簡集〕四七一頁、以下、陽明書と略記する〕

沢瀉が潜庵及び良齋に面晤できなかつたことを終身の遺憾であると託つたことに対して、草庵は「僕の交友中で知るの深きは、良齋より深きはなく、相交わるの旧きは潜庵より旧きはない。この二人は実に当今得がたい益友で、僕の珍重欽望するところのもの。貴君が面晤できないのを恨みに思うのは、尤もなことである」と答えた。続けて、良齋については曩にその遺稿（自明軒遺稿）を刊行した。それは僅々たる一小冊にすぎないけれど、良齋の人品學術はその中に尽くされていて、貴兄も承知しているはず。〔陽明書〕所収の沢瀉書簡によれば、『自明軒遺稿』はその師吉村秋陽を介して一本が沢瀉の許にもたらされた。同遺稿は沢瀉の門下において反響を呼んだらしく、披見を希望する門人が絶えず、讃岐林家に問い合わせたならば入手が可能か草庵に尋ねている。それに良齋は既に鬼籍に入っており、いかんともすることはできない（便宜上、これをS文—Iと称する）、と述べている。

ここでは行論上、草庵が「僕の交友中、相知るの深きは、良齋より深きは莫し」と述懐している、草庵と良齋との交友について述べるとしよう。弘化三年（一八四六）八月、草庵は愛甥にして高弟の池田盛之助等数名を伴つて、「名賢の蘊蔵を叩き、独学固陋の弊を医す」（盛之助の『中州遊覧日記』の中の表現）目的で、はるばる讃州多度津に良齋を訪ねた。当時、良齋は多度津藩（二万石）の家老職を致仕していたといえ、「惣門の禁格別嚴敷」い事情（当時、多度津藩では外部の者とみだりに交渉するのを禁じていた）もあつて、良齋との面会はわずか一刻というきわめて短いものであつた。しかし、草庵の書簡はそれにもかかわらず、両者の契合がいかに深いものであつたかを雄

弁に語っている。すなわち、

誠ニ初而之拜謁ニ御座候へとも、臭味之同処旧来之御懇意之様ニ被_レ存、忝々懷敷事ニ奉_レ存候。(『陽明書』十一頁、

良齋宛書簡)

曩_き者に南海に遊びしとき、高門を叩き、初めて眉宇に接するを獲て、以て年来の渴仰を慰む。惟だ是れ杯酒の間、
响_{しやうく}刻の談にして、未だ以て其の底蘊を尽くすに足らず、遽爾に別れ去る。然りと雖も僕已に兄を以て千古の心友と
為す。(『鳴鶴相和集』復林良齋書)

それは存在の共感とも、また存在の一致ともいうべき事態である。草庵の「千古の心友」という表現は、かかる事態に名づけられたものである。そして事実、四年後の嘉永二年(一八四九)に良齋が病没するまで、まことにその言に相応しく、両者の間には「是れより書札の往来、殆んど虚時無し」(『自明軒遺稿』与源子贊書)というごとく、書簡を介して己が身を置く歴史的境位に即して、宋明時代の儒学思想について深切な体認に裏打ちされた意見が交換された。両者の真切な体験を心性の学に加えたその格調高い言説は、幕末期におけるわが国の儒学思想家の明学研究の水準を占う試金石としての地位を担っている(なお、和牘に限って言えば、その主要な論学書は「林良齋・池田草菴往復書簡」として、『新編陽明学者書簡集』に収録されている。また、平成十一年に刊行された『林良齋全集』(澤田多度津文化財保存会 編)には、山本良英氏の解説した同題の書簡集を収める)。

良齋は会談の翌日、草庵の需めに応じて「偶成₄」と題する一詩とともに、自己の心境を表した「懷刑説」を贈った。両者とともに良齋の三〇歳の頃に成ったもので、良齋の学問・思想の要訣といってもよい。良齋の思想は、その後彼が嘉永二年に四十二歳で病没するまで、十二年間にわたるたゆまない努力によって、草庵をはじめ、その他の同時代の講友たちを瞠目せしめるほどに独得の深みを湛える論理を形成した。それにもかかわらず、三〇歳に成った上記の二文を取り来たって良齋の学問・思想の要訣と称する所以は、その後の彼の学問・思想はいわばそのバリエーションか、あるいはその深化したものであって、二つの作品は既にその後の良齋の学問・思想の展開を原型的に内包している祖型と考えることができるから。

五刑の属三千。世の宿学と雖も、試みに自ら細檢すれば、日用の念慮の微、能く刑外に超然たる者、幾ばくか有る。一念不善なれば、未だ刑に即かずと雖も、而も既に刑中の人と爲る。爾の生まるる所を忝しめずと謂うべけんや。死んや縦え幸いに人刑を免るるとも、焉んぞ能く天刑を免れんや。故に刑を懷うの要は、唯だ自訟慎独に在るのみ。

〔自明軒遺稿〕 笥記

「懷刑」というのは、『論語』里仁篇の「子曰く、君子は徳を懷い、小人は土を懷う。君子は刑を懷い、小人は恵を懷う」に由来する言葉である。古来、『論語』のこの章を解釈した学者は多いけれども、良斎のように人間の心底に蟠る魔性の繫縛性を直視して、心髓微に入るところについて工夫を用いることを説いた学者は稀れであろう。良斎が自説を同じく『論語』に基づいて「懷徳説」としないで「懷刑説」と称したのは、いかにも一切の空言を排して実修を旨とした彼の嚴苦の功夫を物語っている。陽明学は余りにも安易に人間の先天的能力（良知）に信を置きすぎるとは、朱子学側からしばしば浴びせられる非難の声である。即今現在、この瞬間に具足し、箇々に円成している良知の完全無欠性、良知の絶対的主体的性格に十分に信賴するのであれば、「懷刑説」ではなくて「懷徳説」こそそれに相応しいといわなくてはならない。かかる消息について、良斎は「徳を懷うとは、本体に就いて工夫を做す者なり。刑を懷うとは、敬畏の工夫を以て其の本体に復する者なり」（『論語学徴』）と解釈している。この場合、前者は王竜谿・王心齋・羅近溪等王学左派の喜ぶところ。良斎は彼等現成の徒を、終日本体を談じて工夫に及ばず、いたずらに光景を弄するものとして痛撃した（与近藤篤山論学書 四与篤山近藤氏論学術書）。後者は王門帰寂派の喜ぶところ。良斎の立場は思想的には同学派、更に遡っては程門の楊龜山より李延平に至る相伝の静の功夫に系譜する。なお、良斎がこのように「刑を懷う」―敬畏の工夫によって本体に復することを重んじたのは、彼が人間存在の根柢に抜き難く巣くう悪という人間の現実的状况を鋭く見据えていたからにほかならない。

「懷刑説」は、良斎自身の学問の心境、自得の境涯をよく表現したものであつたらしく、良斎の遺文には彼が同時代の学者の幾人かにこの文を贈つてコメントを求めている記事が散見する。ところで、この「懷刑説」が同時代の講友たちの間にいかなる反響を呼んだかは、断片的にしからぬ。そして、草庵の次の文などは「懷刑説」に対す

る最もまとまった応答といえるであろう。曩に草庵と良斎の契合を把らえ来たつて、存在の共感とも、存在の一致ともいふべき事態であると述べたが、最もよくそのことを伺うに足るものである。

当時示す所の懐刑の説一条、偶成の詩一首、手を分かつの際、諸を懐抱に置く。一たび相思すいしう毎に、輒すなわち出して之を視るに、恍然として猶お兄の面目を見て、兄の語を聞くがごときなり。其の偶成の詩の若きは、即ち興寄甚だ高く、以て兄の光明洒落、胸中に累無きを見るに足れり。而して懐刑の説は、則ち自訟慎独、工夫嚴密、以て自ら容るる能わざる者の如し。疑うらくは詩の言う所と相妨ぐるも、而も大いに然らざる者有らん。其れ惟だ工夫嚴密、以て自ら容るる能わざる者の如くにして、然る後始めて以て光明洒落、胸中に累無きの域に入るべし。詩と説と、

並びに是れ自得の言にして、説は尤も以て兄の平生の學術を窺うに足るなり。〔鳴鶴相和集〕復林良斎書

なお、草庵が「懐刑説」を取り来たつて、「自訟慎独、工夫嚴密、以て自ら容るる能わざる者の如し」と評しているのは、注意を要する。草庵はよく静坐につとめた。静坐、すなわち心の主静を求める功夫くわとは、人心の内奥に嚴存する形而上なる実在——理の内在としての本性に沈潜し帰依してゆくことを本色としている。そして、「全躰孔孟之真伝、子思子ノ所レ伝中庸之旨ハ、帰寂之説不レ失レ其伝」と奉レ存候。濂溪・明道・龜山・予章・李延平相伝授いたし候未発之工夫、尤信仰ニ奉レ存候〔陽明書〕七七頁〕という言は、草庵の学が思想的には、宋儒では周濂溪及び程明道、程門の楊龜山、その弟子羅予章、予章の弟子李延平と伝承された静の功夫（朱子のいわゆる本領一段の功夫）、明儒では良知の過激無規範な膨張を抑止するために、その発動場面における活機に注目するよりも、未発の境地における心の安定収束を第一義とする帰寂派（王門の聶雙江、羅念庵がその代表的思想家）に系譜するものであることを語っている。そして、草庵の学問の枢軸を成すともいふべき修静の功夫は、その多くを自訟慎独を学の宗旨とする良斎に負っている。『自明軒遺稿』は、良斎の文十一篇、劄記二十六条、詩十五首を収録したもので、嘉永三年二月に草庵が亡友を記念する意味で、序文を付して刊行した。その刊行の趣旨について草庵は、「良斎は平生至つて著述は少ないが、学問功夫の次第についてはいろいろと感服することが多くある。それ故この僅々の冊子もこのまま埋もれさせてしまふのは残念に思うので、一、三十部活字版で印刷し、朋友知己が一部ずつ所持してもよいのではないか」と述べている

〔陽明書〕一三四頁、秋陽宛書簡)。草庵の序文(自明軒遺稿序)には、良齋の学問の宗旨―それは良齋独得の体験が王学的衣装をまといつて表出せられたもの―と風采德行とが簡明直截に述べられている。草庵は秋陽宛の書簡で、良齋のことに触れて、「殊に此人如御示の交友中にも尤着実精深の工夫有之、平素相切磋いたし候事ども皆々自己経歴中工夫を相用い候事多く、平生精思力踐と申氣味有之候。拙生如き平生口耳知解の学のみいたし候者には、尤对症の薬と毎々警策不_レ少候」(同一二八頁)、「此様之処、亡友林良齋用功尤邃密、古人之風采深く相見へ申候」(同一八四頁)と、その着実な学問風趣を繰り返して推賞している。良齋に見るべき著述が少ないのは、彼が早世したこと、固よりその一因ではあるが、むしろそれだけ彼が広汎な叙述を伴う記誦口耳、訓詁知解という外面的な学修を廢して、切己篤実な体認の学を自己に課したことといわば必然的な結果である。例えば「小子竊ニ存候は、儒門ニ於静坐之習相廢_レ候より、兔角学問と申せば徒ニ詭_レ書作_レ詩文_レ候事而已ニ相成、何之実得も無_レ御坐_レ玄悟之禪者ニ愚弄被_レ致候」(同一〇八頁、秋陽宛書簡)という言などは、最もかかる消息を語るものであろう。あるいは盛之助の表現を借りれば、良齋の学の特徴は端的に「親切」の二字をもつて覆うことができるといつてもよい。

草庵が、良齋はもはや鬼籍に入つていかんともしがたいと言つたことについては、既に述べた。しかるに、潜庵は今なお人の住むこの世界を共にしながら、風評や音容はもはや見ることができない。このことは貴兄のみならず、私も同様に恨めしく思つてゐることである。近ごろ私は所用で浪華に行き、そのついでに淀川を溯つて京都に入つた。それは当人に会うことはできなくても、その家に赴き、妻子を訪問することによつて近日の起居動作の状を仔細に知ることができたならば、わが心を慰めることができるであらうとの意図に出たものである。しかるに、彼の家はことのほか禁令に厳しく聴従して、妻子でさえみだりに外部の人間と接触することを禁じてゐる。私はますますその幽囚の苦を想い、同情に堪えず、長い間行きつ戻りつ、悽然として涙が下るのであつた(便宜上、これをS文―IIと称する)。草庵が「(僕の交友中)相交わるの旧きは、潜庵より旧きは莫し」というごとく、潜庵との交友は、還俗した草庵がその師相馬九方の後を慕つて京都四条室町の相馬塾に身を投じた二十歳の頃に遡る。私はかつて草庵がまだ僧名を弘補という、但馬高野と称せられた名利満福寺の青年僧であつた頃、但馬を離れて上京した九方の後を追つて出奔し

たのを、カール・ロレンツを「母」とみなすガンの子（マルティネと名付けられた）に譬えたことがある（『陽明学』第十二号所収「池田草庵——康斎の流亜（下）——」。相馬塾に在った四年間、草庵は助教と学僕との二役を兼ねていたといわれる。草庵は九方や九方の友人馬木南城等を介して、当時鈴木遺音門下の潜庵と締交するに至ったらしい。後に潜庵は草庵に会ったときの初発の印象を、こう記している。

子敬（草庵の字）の初め京に来たるや、予一再見ゆ。年未だ弱冠ならず、形貌短少にして、目光閃々として人を射、議論縦横、恢々乎として前に古人無き者の如し。予特に驚嘆す。而して未だ之を許さず。既にして子敬廬を松尾山下に結ぶ。窮苦寂寞なるも、而も少しも其の志を変ぜず。予、其の廬を訪い、其の学を叩くに、深沈掩抑にして、其の光を顧さず。而して精悍の氣、馴るべからず。嗟乎、子敬問学変化の功、其れ量るべけんや。〔潜庵遺稿〕一、贈池田子敬序）

試みに『池田草庵全集』第一編の巻頭を飾っている草庵六十四歳のときの写真を見てみよう（明治十年十月一日、門人の三方浩哉が青谿書院で撮影したもの）。なるほど潜庵が「形貌短少にして、目光閃々として人を射」と形容しているごとく、写真の中の容貌は清瘦、老いてなお両の眼光は炯々として精悍の氣がみなぎっていて、草庵の若かりし頃はいかにもさもあつたろうと思わせるものがある。しかし、潜庵は初対面の強烈な印象に驚嘆を覚えつつも、「而して未だ之を許さず」というように、いまだ草庵のことを直ちに肯つてはいない。潜庵が真に草庵を深く肯つたのは、彼が相馬塾を辞して京都の西郊梅宮・松尾の草庵において隠棲読書の生活を始めた後のことである。なお、草庵が九方の許を辞して洛西に隠棲したこと的神史的意義は、彼がようやく護園派（徂徠学派）の学者九方の奉ずる古文辞学の圧倒的な影響を脱して、宋明の儒学思想、わけても自ら「拙生ハ少年より之入処一旦陸王之風ヲ喜ヒ」（『櫻朱子学者書簡集』一一一頁、端山宛書簡、以下、朱子書と略称す）というごとく、陸王学へと転回していく過程として把らえることができよう。そして、草庵が陸王学に触れる直接の機縁を準備したのも、卓然として京師に陽明学を標榜した潜庵（このことについては後述する）が与かつて力があつた。

草庵は晩年、潜庵に当てた書簡の中で京都時代の往時を回顧して、次のように述懐している。同書簡は草庵集中屈

指の名篇で、ことに潜庵との交情を尽くしている。

願うに僕と兄とは、早年より此の学を同じうして、交際甚だ親し。当時兄は京に住み、僕は西山に居る。一たび相想う毎に、輒ち必ず相過從して、学を論じ史を評し、人物古今、商究せざるは莫し。僕、兄の文を誦すれば、則ち兄、僕の詩を批す。僕就いて兄の酒を飲まざれば、則ち兄来たつて僕の菜を喫す。嵐峽の花を觀、桂川の魚を釣り、輕風淡烟、遊賞行樂、亦た未だ嘗て相互に其の歡を尽くさずんばあらざるなり。其の後、僕又た從つて京に移る。

兄の居と、相距たること頗る近ければ、即ち其の情好も亦た益ます密なり。〔草庵文集〕下、与春日潜菴書

上の文に、嵐峽に桜を觀、桂川に魚を釣り、そよそよと吹く風、霞のたなびく春景の中、柔和な陽光に包まれた春の野辺を歩きながら、相ともに心ゆくまで歡を尽くしたことが述べられている。潜庵の「唐劉長卿漂母詩跋」（同下所引）によれば、天保九年（一八三八）三月十五日、潜庵は草庵を松尾の草廬に訪ね、翌早朝、相携えて嵐山に遊んだらしい。時に潜庵二十八歳、草庵は二十六歳、ともに青年時代に属する。後に草庵はまたたく間にもはや二十余個の星霜を経ってしまったといつて、自己と潜庵とがそれぞれ不可避に投げ出されている苛烈な歴史的現実と対比させつつ、この時の松尾嵐峽の登遊を、こう回顧している。

今を以て之を觀れば、則ち当時の松尾嵐峽の遊は、尚お落拓中極めて得意の境と為す。身世を回顧するに、豈に慨然たるに勝えんや。（同下、書春日潜菴所書、唐劉長卿漂母墓詩、並潜菴自跋之後）

「落拓中極めて得意の境」という表現は、彼等の青年時代を形容し得て甚だ含蓄があるといわねばならない。「落拓」はこの場合、落ちぶれる、零落するの意であろう。草庵が「落拓」の二字を用いたのは、「嗚乎、吾が輩落拓たる書生にして、所謂漂母が如き者、安くにか在る」という、潜庵の跋語中の二字を襲用したものの。思えば青年期の人間は、社会的にはいまだ何者でもない、社会的に何者かとしてあるべくいまだ猶予されている。このような意味において青年期は、草庵がいうように「落拓中」、すなわち没落の只中にある時期だといつてよい（もつとも、やかましく言えば、青年期は本当の意味ではいまだ没落を知るものではなく、即自的に没落の中に在るといった方が正しい）。もつとも、そのことは松尾の草廬に窮居中の草庵において最も妥当することであつて、現に久我家加判の列に連なり、家

政を司る潜庵についてはしかく言いがたいのではないかも知れない。しかし、潜庵は社会的地位においては久我家諸大夫であり、「落拓中」とは決して言い得ない。しかし、潜庵が「嗚乎吾が輩落拓たる書生」ということ、あるいは九方が「且つ僕の源襄（源は潜庵の本姓、襄はその名）を称するは、之を今日に称するに非ずして、之を他日に称するのみ。（中略）源襄は、一書生なり。今を以て之を言え、稱するに足る者無し。然れども其の志彼の如し、其の才彼の如し、其の困苦も亦た彼の如し。而して他日大成せざる者は、未だ之れ有らざるなり」（太田虹村『春日潜菴伝』所引）というごとく、青年期の人間が勝義に「落拓中」であるのは、社会的地位においてであるよりは、むしろ精神遍歴の只中であつて思想的には（こういう表現が妥当性を欠いていることはよく承知している）いまだ何者でないか、あるいは精々何者かであるべく途上にある者にすぎないということではないだろうか。少なくとも後年、潜庵・草庵の両者がそれぞれ自己の奉ずる學問に導かれて、自ら靖んずる境地に達したのに比較すると、この時期の彼等はいまだ何者でもない。

しからは、「落拓中」の彼等にとつて、何ゆえ松尾嵐峽の登遊がしかく「極めて得意の境」といい得るのだろうか。潜庵が明記している程であるから、恐らく天保九年三月十五日は絶好の行楽日和に恵まれたに違いない。潜庵と草庵はうらかな柔らかな陽光に包まれた春の野辺を歩きながら、春らしい日を謳歌し讚嘆しているように見える。「例えばある春の日が春らしい春日であることは、当然であり自然なことであるといえよう。しかもある春の日が、本当に春らしい日として讚嘆されるのは、春であるにもかかわらず、春らしからぬ日が稀れではないからである。否、本当に春らしい日、すなわち春の本質がそのまま素直に現前しているような春の日は稀れであるとさえいえる。春という自然現象についてさえ、春であるのに春らしからぬという不自然な現象が稀れではない。」（武藤一雄氏著『キエルケゴール』）まして、出合いという人格と人格との相互の交わりにおいてはなおさらのことである。草庵の京都時代の友人清田丹藏が、「京師に賢師良友乏しからず」といったのを取り来たつて、草庵が「足下の所謂賢師とは誰と為すか、所謂良友とは誰と為すか。（中略）緝おとこし毎に子賛と談じて京師人物の衰に及んで以為えらく、未だ今日の甚しきが如き者有らざるなり、と。而るに足下独り以て其の人に乏しからずと為すは何ぞや」（『草庵文集』上、与清田丹藏書）と鋭く反問したのは、裏返して言えば青年時代の草庵と潜庵が、どれだけ明師良友に餓うえていたかを物語つてい

る。彼等とともにその若き日に自己を導くに足るだけの力量を有する師家に遇い得て、その人格の発する白熱した光に触れて静かに自己の内奥より化せられるという経験を遂に持ち得なかつた。そして、このことは彼等の生きる時代の乏しき、否定性として把らえられた。それにもかかわらず、彼等は互いに相手に知己を見出すという人生の勝縁に恵まれた。このことは、例えば草庵がその「西山草菴記」の末尾で、「余の若きは則ち幸いに国家太平の日に生まれ、遭う所淵明（東晋の自然詩人）と甚だ異なり。而して独り尚お其の曠古忠貞の遺風を慕う者なり。誰か又た其の心を識る者有りや」（同上）と呼びかけたのに対して、潜庵が「天地の間惟だ一源裏有りて之を知る」と応答しているところに、最も象徴的に表われている。出会いという人格と人格相互の間において起こる存在論な事件は、其の関係性を光に譬えるならば、その人の生において、森の中に樹が伐られてできた空間のように、存在の明るみが開かれているといつてもよいであろう。草庵が潜庵と行を共にした、うらかな柔らかな陽光に包まれた松尾風峽の登遊を「極めて得意の境」といったのは、「落拓中」の彼等が「今―此処」でゆくりなくも遇い得たということの集中的表現としての意義を担っている。青年時代の風峽の登遊を叙する草庵の筆致は、明るい光で莊嚴しょうげんされている。しかし、草庵と潜庵の二人を包む現実はその故に一そう暗い。その輝きは即今現在、自身が不可避に身を置くことを余儀なくされている苛烈を極めた歴史的現実（草庵の「余永く山陰に竄伏す、而して潜庵は近歳頻りに災禍に遭い、黜棄せらるること特に甚し」（書春日潜菴所書、唐劉長卿漂母墓詩、並潜菴自跋之後）という表現には、人生の悲運に遭遇している潜庵は固よりであるが、草庵もまた不本意な困難な現実と直面せられていることを伺わせる）に返照せられた結果、ひとときわ輝いて見えるのではないだろうか。しかれば、その苛烈な歴史的現実とはいかなる事態を指すのであろうか。それが次節での主題である。

二

それでは、早世した良齋とは異なつて、今なおこの生を同じくし、この實区せかいを共にしながら、草庵が潜庵の「声光

音容、復た見るべからず」というのは、いかなる事態であろうか。わが国の歴史上かつてなかつた幕末維新という国歩艱難な秋に遭遇して、十数年の政治過程（嘉永六年のアメリカ使節ペリーの浦賀来航から、慶応三年の王政復古、明治維新に至るまで）を、潜庵と草庵の両者はきわめて対蹠的に生きた。世々公卿久我家の諸大夫を世襲する家系にその長子として生まれ、執政として久我家政に手腕を発揮し、公家の政治発言力が増大し幕府を掣肘するのに応じて、主人建通を輔佐して朝廷の枢機に参画した潜庵と、もと「農夫の子」（草庵の言葉）として生まれ、壮年以後再び山田に退居して、官途に意を絶ち、処士として簡素な生活に甘んじた草庵とでは、その生が描く軌跡は大きく異ならざるを得ない。ある事情により、幕末勤王運動に関する、潜庵の偉勲を語るべき断簡零墨をすら見出し得ずして、その真相を如実に証拠立てることができないといわれる（『春日潜菴伝』）。この場合は、潜庵の「偉勲」を、潜庵の果たした「歴史的役割」と読みかえたならば、一そう分かりがいいかも知れない。このことは幕末勤王運動に関する潜庵の史料が非常に不足していて、その行動を客観的に判定することが極めて困難であることを予想させる。潜庵の草庵に宛てた次の書簡などは、時代の激浪に直面することを余儀なくされて、困難な、すぐれて政治的な現実を回避したり傍観視したりせずに、「只だ其の時なり」（『潜菴遺稿』三、丙寅録）と諦観して、暴河の如く流れる歴史の奔流の只中に身を投じた儒教的教養の中に生きてきた幕末知識人の一つの行動類型を示している。すなわち、

拙も不替読書講習之樂は無之候得共、近來は公私共多忙に而暮し候。諸方書面之往來一切相断、時々山房高樓之事共遠想に及候得共、音問打絶候。且年來之時事、漸々危迫之様に相覚候。是等之事、筆頭往來に而は難_レ尽、面晤之時と存候。惣而御無音に相成候。昨年公喪（久我通明の死去を指す）以来、長兒吐血病に而、一旦は危急に迫り候。老母今年八十、春夏之頃より病氣に而、是も一時は心痛に及候。此頃に至り、兒並老母等も追々快方に及候得共、右様之事に而、彼是多忙に打過候。乍_レ去此は一家之憂、當時之大患不_レ容易、少し有_レ心る者は、安居之時には無_レ之と存候。然るに吾輩に在而は無_レ別策、矢はり只読書練磨之外に無_レ別事と存候。近頃講習之書如何。序に御申越し被_レ下度候。拙も先年は通典之類、涉獵に及度と存候得共、近頃は多事にも有_レ之、矢はり旧業を熟玩、妙に存候。当夏も学案（明儒学案）を一読、警策不_レ少、此頃は又温史（資治通鑑）を讀始候。思量前年とは稍別

に存候得共、年力既過、齒髮漸衰、且時事如此、有レ時は一室独坐、不レ堪「嘆慨」に中夜不レ寐待レ明。今日生計略足、園林之樂、生徒講会之遊、亦前日之類に無レ之候得共、世界亦一變、人生与レ憂俱生之語、不レ虚と存候。〔陽明書〕五六一頁〜五六二頁、なお、この書簡は（安政三年）十月五日の日付を有する）

なお、安政五年以後の潜庵の行蔵事跡を略述すると、以下のごとくである。同五年十月、大老井伊直弼が尊王ノ攘夷派に対して行つた徹底した弾圧―反対派の大名・公卿を退隠せしめ、多くの俊秀な幕吏を罷免し、志士を容赦なく検挙処断した―、いわゆる安政の大獄は、国事に奔走していた潜庵の身にもついに及んだ。かくて十二月二十四日、京都西町奉行所に召喚された。直接の容疑は高名な漢詩人にかつ志士の棟梁、梁川星巖の遺物中から潜庵の書簡二通が見つかつたこと。一旦は放免されたが、二十六日再喚問され、六角獄に投ぜられる。在獄数十日、翌安政六年二月二十五日、六角獄より江戸に檻送され、岸和田藩邸に拘禁せられるに至つた。十月七日判決が下り、永押込を申し渡される。

一言でいえば、この時期の潜庵は、例えば国事執掌期の大橋訥庵の生がそうであるように、きわめて状況的な存在であつた。このように、潜庵の生とその歴史の意味とが極めて状況的であり、状況の中に置いてでなければ明らかにならないのに比して、草庵のそれは現実のイデオロギ―闘争自体から意識的に距離を保とうとする、徹頭徹尾非状況的ノ非政治的、静観的なものであつた。草庵は潜庵に宛てた書簡において、この十数年間のわが国曠古の危局を自身がどのように過ごしてきたかを潜庵と対比させながら、率直に語っている。

安政戊午の歳（安政五年）、天下始めて多事なり。士大夫多く厄難に罹る。兄も乃ち亦た无妄の災に遇い、檻車もて東下す。後勢益ます変ずるに及んで、或いは進み或いは黜き、終わりて幽囚禁錮、累家眷に及ぶ。僕山陰に伏し、兄の故を側聞し、兄の患を憂えざるには非ざるなり。此の時に方り、政体決裂、横議洶涌し、党同伐異、人殺戮を擅にす。氣習の激する所、凶讎天に浴れば、則ち閑散僕の如きも、亦た猿鶴の驚くを恐れ、山に入ること益ます深く、戸を閉ざすこと益ます牢く、口を嚙み影を駈めて、僅かに以て鷓鴣の一枝に安んずるを得たり。是に於てか分離睽絶して、殆んど隔世の如く、復た声息を通ぜざる者、今に于いて十有八年なりき。僕の疎曠怠慢に由ると

雖も、抑そも亦た惶恐畏慎の余、自ら過慮を免れざる者有り。『草菴文集』下、与春日潜菴書

それは宛ら「うまく隠れていたものこそ、いい生き方をした者だ」という西洋の格言（ラテン語の諺。デカルトも用いている）を髣髴とさせるものである。そして、このことは草庵が自ら選び取った生の必然的帰結であった。

もつとも、このように言ったからといって、それは直ちに草庵の生が起伏に乏しい平坦なものであることを意味しているのでは固よりない。例えば草庵五十五歳の時にかかる「感懷」という詩を見てみよう。「身贏く才拙にして為すこと能わず。空しく隱憂を抱き 且く時を避く。風雨三更 孤枕の夢 黯淡たる灯影 漏殊に遅し」『草菴詩集拾遺』なお、草庵の揮毫にかかる同詩は「丁卯冬感懷」に作る。丁卯は慶応三年（一八六七） 承句の「隱憂を抱く」という表現は、草庵の生涯の底を貫いているものが、外部的な平坦さとは裏腹に、決して単純なものではない、苦惱に色取られたものであることを証している。わが国の歴史上かつてなかったような幕末という国歩艱難な秋に遭遇して、その苛烈な歴史的現実があらゆる読書人に投げかけた巨大な問題について、草庵が草莽の臣として僻境に窮居してアクティブでなかったという理由だけで、その問題に対して苦悩の跡を止めていないなどは、凡そ考え難い。但馬における草庵の読書講学と黙坐静修という簡素な生の在り方それ自身が、自己の生きる時代の投げかけた課題に對する一つの応答としての性格を担っている。

草庵に「題友人某所拘幽室図」『草菴文集』中）なる二〇〇字に満たない小文がある。その表題には「友人某」とのみあつて、その姓名が伏せられているところにも、彼の時勢に処する慎重な配慮を読み取ることができようであろう。なお、頭注に「按ずるに、某とは、蓋し春日潜菴なり」とあるのが参考になる。潜庵拘禁の報に接した草庵は、その丹念なる日記『山窓功課』にその感想を「又た土屋生に因りて泉州の信を得、讚州春日兄の事を聞く。憤然に勝えず」（安政六年四月十八日）と簡潔に記している。「憤然に勝えず」という表現には、「俊邁英達、進取甚だ鋭く、等輩中未だ其の比を見」ない（『鳴鶴相和集』復良齋書、また、良齋の「与春日潜菴書」を参照）才幹の豊かな友人をかかゝる罪科に処した幕府当局者に對する義憤が込められている。もつとも、「友人某」と初めからその姓名を伏しているところからも判然としていることく、義憤といつても、それは友人のために当局者にプロテストするという外に開か

れたものというよりは、むしろ自己の内面へと深く閉じられた内心倫理化せられたものである。草庵の旧師九方は当時岸和田藩儒であり、その養嗣子土屋岩太郎（鳳洲）は折りしも青谿書院の草庵の許に従学していた。こうして潜庵拘禁の報が、次いで潜庵幽居の状を描いた絵図が草庵の許にもたらされた。かくて草庵は九方が贈るところの絵図を牀頭に掲げて「題友人某所拘幽室図」の一篇を作った。¹⁰ すぐ上で草庵の義憤が外に開かれたものではなく、むしろ自己の内面へと閉じられた内心倫理化せられたものであると言った。それは同文の末尾にこの絵図を掲げて省覽に備える趣意を述べて、「一は則ち以て友人の患を体し、一は則ち以て自己の功を励まさん。友人の患を体する者は、親昵已むべからざるの情なり。自己の功を励ます者は、亦た自ら效す所以なり」と述べているところに端的に表れている。前者は友人の悲運に対する満腔の同苦の念の表明であり、後者は自己に対する警策である。そして、「題友人某所拘幽室図」に流れる二つの基調意識は脈々として「復東崇一書」へと引き継がれているのである。すなわち、S文Ⅱの「……僕益ます其の幽囚の苦を想い、之を哀しみ之を憐れみ、徘徊脚蹶して、悽然と涙下る」という表現には、紛れもなく幽囚中の潜庵を想う同苦の念を觀取することができるであろう。しかも草庵の述懐は、潜庵の近日の状を審らかにしたいという一心に駆られてわざわざ京都の春日邸に赴いた者のそれであるから、その色調は文面からも伺えるように極めて直截的である。草庵の告白は更に続く。

然りと雖も之を哀しみ之を憐れんで、以て涙下るに至る者は、乃ち朋友の至情なり。而して彼は則ち必ず以て善く之に処する有らん。天地有りてより以来、盈虚消長、吉凶憂歡、相倚り相伏す。是れ人世の常事にして、仁人義士、往々にして免れず。乃ち今日の事の如き、幽囚の久しきと雖も、幸いに未だ以て刀鋸鼎鑊（ともに刑具）の禍を踏まず。且つ彼平生深く読書を喜ぶ。意うに今日復た他事の閑を妨ぐる事無ければ、晨夕孜々たらん。更に精を専らにするを得て、上は羲皇の卦画（『周易』を指す）、二典（『書経』の堯典と舜典）三謨（『書経』の大禹謨・皋陶謨・益稷の併称）、周南召南（ともに『詩経』国風の編名）より、以て春秋戦国、漢唐宋明、二十一代の史に至るまで、涉獵闔尽せん。其の間天理人事、何物か有らざらん。蓋し喜ぶべく悲しむべく、痛憤歎息直ちに慟哭を為すべき者、在らざる所無し。乃ち今日其の身世の遭う所の如き、古来多く有り。沈潜反復、従容として之を遊び、天

「を楽しむ命を知り、其の正を順受すれば、亦た以て其の幽囚の苦を忘るるに足る。(便宜上、これをS文―IIIと称する)

ここでは草庵の主観的感情の吐露という直截的な表現は押さえられて、幽囚中の潜庵の読書人としての日常が描かれている。もともと潜庵の日常といつても、固よりそれは草庵の想像したものであるが。しかし、いみじくも「同声相應し、同氣相求む」という。草庵の想い描いた幽居中の潜庵の日常が見当外れなものでなかったことは、例えば次の一事がそのことを証している。岸和田藩邸に拘せられること凡そ八ヶ月。安政六年十一月、潜庵が帰洛するや、京都所司代は直ちに長子仲襲との同居を禁じ、洛北の旧廬に幽閉せしめた。潜庵は屏居中に「落得閑」の三文字を書し、紫野雲林院の楯間に掲げて、己の心境を示した。また、「人生閑適最も宜し、万物皆忙裏に過ぐ」の二句を書いて幅としたのも、この頃である。「落得」は、…に帰結する、結局…になるの意。潜庵は文久二年十一月に永押込を赦され、翌三年七月には宣下を賜わり官位旧に復したが、それまでの数年間は「落得閑」の三字が、いみじくもその間の彼の心事を最も雄弁に語っている。潜庵はその「閑窻余筆」の序で、忙裏に過ぎてゆく造化の体に比しながら、幽居中の一閑人たる自己の境遇を語っているが、それはなるほど「落得閑」三字の注釈としての地位を担っている。戊午の晩冬、余、罪を得て拘囚せられて獄に下ること、殆ど周歲なり。既にして放廢禁錮せられ、人事に接するを得ざるなり。窻下に独坐し、時有りて書を読み、悠然として心に会する者あり。蓋し窮すれば則ち閑なり。窮の極みは則ち閑の至りなり。噫、造化の体、物々忙ならざる者無し。而して余何人ぞ、今一閑人たるを得たり。此れ豈に易々たらんや。余筆の著わす所以なり。庚申(万延一年)仲秋上浣、吟風弄月の東軒に書す。〔潜菴遺稿〕三

草庵はS文―IIIの中で、逆境の渦中に在る潜庵に期待をこめて「善処」という言葉を用いている。すなわち、「而して彼は則ち必ず以て善く之に処する有らん」ところで、この二文字は「題友人某所拘幽室図」でも用いている。すなわち、「然れども某には学有り、守有り。必ず善く処せん」。そして、「閑窻余筆」の序文に示された境遇は、潜庵が最も不遇な時期(潜庵は家庭においては、幽居中の万延元年三月に母を、そして同年の九月には長子を喪うという人生の不幸に遭遇している)を、草庵の期待した通りに善く処してきたことを語っていないだろうか。「落得閑」の

三文字は、この時期の潜庵の境遇を最も集中して表している。草庵は幽囚中の潜庵の日常に思いを馳せて、「彼は平生、大いに読書を好んでいるから、定めし今ごろは閑暇を妨げるよそ事もないので、読書に専念して朝夕孜孜として、上は羲皇の卦画、二典三謨、周南召南から、春秋戦国、漢唐宋明、二十一代の歴史に至るまで、涉猟して読破していることであろう。そこには天理・人事の両界にわたってあらゆるものが具わっている。今日、彼が遭遇している身の不幸などは、昔から多くの事例があることだから、それに没頭して繰り返し研究し、従容として賞玩し、天を樂しみ命を知って、正命を順受したならば、幽囚の苦を忘れるに十分である」と述べている。潜庵の「閑憲余筆」の序文は、因らずも草庵のこうした期待に対する応答という意義を担っているといえないだろうか。

私は曩に草庵の「題友人某所拘幽室図」を取り来たつて二つの根本基調を指摘した。その一は拘囚中の潜庵に対する同苦の念であり、他の一は自己に対する警策である。そして、S文―IIIはこの二つの根本基調を橋渡しする地歩を占めている。

且つ吾が輩の平生の学問は、多く紙上より看過ぎ、未だ嘗て实地に功を用いず。乃ち今日の遭逢の如きは、浸尋刺落し、禍幾膚に迫り、復た躲避すべからざれば、則ち心を動かし性を忍ばせ、増益せしむること少なからず。古人云わずや、憂患に生きて、安樂に死すと。則ち又た其の人の必ず善く徳を立つるを想いて、還つて以て吾が輩の放浪汗漫たりて、終に其の身を誤らんことを慮るなり。嗚乎崇一足下、人の世に在るや、倏忽に変化し、須臾に泯滅す。譬えば猶お風前の枯葉、草頭の朝露のごとし。其の間吉凶禍福、何ぞ曾て言うに足らん。惟だ独を慎しみ徳を立て、卓々として表見して、始めて以て虚生と為さざれば、則ち潜庵が今日の事、其の禍福果して未だ測るべからずして、余の幸いに免れ、生を偷みて苟くも以て日を度る者、敢えて以て自ら慶ばず。警省惕厲、痛無くして痛を生じ、毛髮竦動して、以て吾が情を振う。是れ則ち余の竊かに自ら效す所以なり。而して又た余の敢えて三十年の旧知に反かざる所以なり。(便宜上、これをS文―IVと称する)

S文―IVがその文面からいって、自己に対する警策を根本基調としていることは疑い得ない。草庵は『孟子』(告子上)を踏まえながら、人生の悲運に遭遇して、人生において最も失意不遇の時期が、一人の人間を鍛錬し陶冶して高

い人間化への飛躍を来たすことを説いている。孟子は舜・傅説・膠鬲・管夷吾・孫叔敖・百里奚等昔の賢者達の出自を明らかにした後、一つのもものが時を待つて静かに形成されてゆく、この堆積作用を醸成する過程を、こう叙述している。

故に天の將に大任を是の人に降さんとするや、必ず先ず其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞せしめ、其の皮膚を餓えしめ、其の身を空乏にし、行なうこと其の為さんとする処に抔乱せしむ。心を動かし性を忍ばせ、其の能くせざる所を會益せしむる所以なり。人恒に過ちて、然る後に能く改め、心に困しみ、慮に衡^{とら}つて、而る後に作り、色に徴れ、声に発して、而る後に喩る。『孟子』告子下)

古来、かかる事態を指摘している古典や格言は『孟子』に止どまらず、枚挙に遑がない（例えば張横渠もまたその『西銘』の末尾において、「貧賤憂戚は、庸^もて女^めを成に玉にす」といつている）。しかし、思えばこの一見平凡に見える事実には、深い人間的洞察が込められており、その事実は深い人間的意味に充ちているといわなければならない。

草庵が良齋宛の書簡で、潜庵の人となりを「俊邁榮達、進取甚だ鋭く、等輩中未だ其の比を見ず」と推賞していることについては、既に触れた。また、草庵は碩水宛の書簡において、潜庵の氣象を次のように形容している。

「此老少年之頃より氣象英邁、目中少^も其比」。深く日以喜ひ平生之益友と奉^た存候。（中略^①）潜菴^②之長処邁往直前、壁立万仞と申様之氣味ハ平生其卓立ヲ悦び居申候。（『朱子書』二八二頁）

草庵の上の二つの潜庵評は、それぞれそれが発せられた時期も、またそれが発せられた対象も異なりながら、共に潜庵の性格について同じ一つの事態を指し示している。同じ一つの事態とは、すなわち潜庵の豪邁な氣象、これである。潜庵は、王童谿とともに二王と称せられた王学左派の代表的思想家王心齋の全集を、序文（王心齋全集序）を付して刻しているように（弘化四年）、日本陽明学派においては、沢瀉とともにその豪邁な氣象・性格において良知現成派説に近づき得る人であった。例えば次のエピソードなどは潜庵の豪邁な氣象を向うに足るものではないだろうか。碩水は漢学所講説官として在京中、一時期同僚の間柄にあった中沼葵園（鈴木遺音門下）を介して、崎門学派の朱子学を学んでいた潜庵が、その後山田安五郎（方谷）に触発されて學風が一変し、陽明学派中の人となったという話を聞

き及び、書簡で草庵に「実説ニ御座候哉」とその真否を問い合わせている。(なお、潜庵が崎門学派の朱子学を学んだというのは事実で、潜庵の旧師遺音の父潤斎は西依成斎門下の高足で、遺音は夙に家学を紹述して名があり、縉紳庶人の及門する者が多かった。また、潜庵の父一冬軒もまた成斎に就いて学んでいる)。草庵は碩水の質問に対して、十数年間を京都に在って、常に潜庵の身近にあつてその若き日の消息に通じている者に相応しく、懇切を極めた回答を寄せている。

山田安五郎ハ拙生も元来懇意。併シ春日ハ別段懇意ニ御坐候。是ハ余程之英物。廿六七之頃より読書学問、童之介(癸園の兄)輩之上ニズツト卓越いたし、精悍気魄進取之志も甚々鋭く、帰国後邦君ニ大ニ登用セラレ、国政変革、頗ル可觀之事功も有之候由ニ御坐候。此人京游之後東都へ游申し、愛日楼(佐藤一斎)ニ遊ビ、又羽沢ノ松崎(謙堂)へモ從游いたし候者ニ御坐候。京地ニ游学之時より既に少々姚江之学ヲ竊ニ悦ビ申候。(同上、二八六頁)

草庵が山田方谷について直接言及したものは、草庵の遺文について見ても決して多くはない。これなどは草庵の最もまとまつた方谷評といつてよい。方谷は経世家として名を成したが、彼もまた幕末維新期の陽明学者として、潜庵や草庵等と同じ時代の課題に生きた精神的同時代人としての思想的骨格を有する人物たるを失わない。その限り、われわれの関心の埒内にある。右の文面からも伺われるごとく京都時代の方谷は、学問・志操ともに周囲を圧した非常に傑出した人物であつたらしく、若き日の草庵に強烈な印象を刻している。

それでは、癸園がいうごとく、方谷の存在は潜庵が陽明学に転入するのに直接与かつて力があつたのであろうか。草庵はこの問いに対して、潜庵が陽明学に傾斜していくことにアレルギー反応を示し、そのことの史的意義に無理解な遺音門下が(遺音は潜庵の門籍を刪去し破門に処したといわれる)、事態をしかく矮小化して把らえたにすぎないと回答している。上來見來たつたごとく、草庵は方谷の学問と人物について、自身卓越した儒学者であることを認めるに吝かではないけれども、さすがの方谷も潜庵を触発しその生をオリエンテーリング定位置するまでには至つていない、潜庵が崎門学派の朱子学から陽明学へと転回するについては、やはり潜庵独自の体験的背景が存していることを指摘している。すなわち、

潜菴之姚江ヲ学び候事、鈴木門下ニテヒドク忌嫌ひ候故種々ト申、安五郎ニ誘われ候杯位ヒ之事。潜菴ハ元來英邁卓立之人物。如何様交友之内ニハ時々談話ニハ及ヒ可レ申候へとも、中々安五郎の提撕ニヨツテ王学ニ入候杯申様之者ニテハ無之候。自分自立力量不_レ乏、是等彼内之者之知ル処ニアラズ候間、此段左様御心得可_レ被_レ成候。(同上)

孟子はいみじくも「文王を待ちて然る後に興る者は、凡民なり。夫の豪傑の士の若きは、文王無しと雖も、猶お興る」(尽心上)といっている。「豪傑」というのは、朱子によれば人に過ぐる才智を有する者の称のこと。自ら「記夢」一篇を草して、「年二十七、王子全集を得て、日夜誦読し、幾んど數十過。中心豁然として、覺えず喟然として曰く、人と為る、当に此に至つて止むべし。学を為す、当に此くの如くにして止むべし」(『潜菴遺稿』一、あるいは同卷所収の「与池田子敬書」を参照されたい)と告白しているごとく、過去の聖賢哲人の書に目を曝すことによつて、卓然と京師に陽明学を標榜し得た潜庵とは、まことに草庵がいうように「自分自立力量乏しからざ」る人豪というに相応しい(もつとも、潜庵がその思想遍歴の行路において、その思想を一身に体现しているような活人格に直に触れる経験をついに持ち得なかつたということが、潜庵の陽明学の性格をどのように規定しているかという問題の究明は、われわれを別の主題へと導く)。草庵はここでも「潜菴ハ元來英邁卓立之人物」と称している。そして、その豪邁な氣象の潜庵が、今まさに人生の悲運に遭遇して試みにあつていたのである。

再び「復東崇一書」S文―IVに立返るとしよう。恐らく草庵にとつて幽囚中の潜庵の日常(といつても、既述のごとく飽くまでそれは草庵の想像したものであるが)というものが、鏡のようなはたらきをしているのであろう。あるいは結局は同じことであるが、潜庵の遭遇している苛烈な現実が、草庵においてイデーにまで昇華されている。そして、自己がその鏡をのぞき込んで映し出された自己の現実が、自らの内なるイデーの光によつて返照せられて、厳しく裁断されているのである。あるいは、その自己反省は単に自らの内へと返照することではない。それはむしろ他の眼に映じ、他を屈折してくる自己を見ることといった方が、一そう正確かも知れない。上來述べたごとく、草庵は壮年以後再び山田に退居して、官途に意を絶ち、処士としてその後半生を但馬の青谿書院に在つて読書と講学で専念し

た。そして、今まさに他ならぬそういう山居における日常―青谿書院における読書と講字という日常が、潜庵の苛烈な現実には返照せられて、「余の幸いに免れ、生を偷みて以て苟くも以て日を度る者、敢えて以て自ら慶ばず」、「而るに余や山居に閑適し、出入優游、荒廢偷惰して、光陰を過こし易し。幸いにして友人免罪の日に遭い、手を把りて相語り、心を指し相証すれば、則ち赧然として愧作し、応に身を惜くに地無かるべし」（題友人某所拘幽室図）と、寸毫も仮借を容れぬ厳しさで裁断せられているのである。

三

ここでは行論上、青谿書院における草庵の日常、そして、その山居における境涯がいかなるものか検討することから始めよう。それは草庵が自己批判しなければならぬほど、しかく頽落したものであつたらうか。私は曩に「青谿書院記」の「弘化丁未六月、実に始めて徙る。然る後に吾が終焉の凶定まれり」という表現を取り来たつて、その意味するところを述べた。草庵はこの文に続けて、わが「読書の処」である青谿書院の占める地勢、書院の名の由来を叙した後、書院を取り巻く四季朝暮の風物景趣を種々叙述し来たつて、わが「優游自適」の境涯を格調高い筆致で謳歌している。すなわち、

谿に沿つて上ること二里許りにして、青山村有り。山農數十家、林樹に擁蔽せられ、微かに屋角を露わす。窓を推して之を望めば、則ち宛乎として仙区を縹渺の際に仰ぐが如し。還りて欄に憑れば、則ち鷹巢巖其の北に竦え、進美、赤崎の諸山其の東に横たわる。而して蓼川の水巖に向かつて注ぎ、又た折れて東す。青郊白沙、遠林深叢、其の左右に映帶す。是に於てか春は則ち其の新緑を愛し、夏は則ち其の涼風を迎え、秋にして黄葉爛漫、冬にして氷雪皎潔たり。若し乃ち朝には雲を含み煙を吐きて、変態窮まらず。暮には夕陽光を回らし、瀟灑清迥にして、又た寥廓幽遠なり。而して庭際には松竹桜梅・桃李海棠を雑え植う。的皦開落の花、歳寒後凋の葉、亦た以て目を娛しませ心を怡ばしむるに足る。而して山禽溪響は、吾が読書の声と、日夕相応答して已まず。嗟乎是れ乃ち吾の優

游自適、樂しみて老を待つ所以の者なり。〔草菴文集〕中〕

草庵はその丹念な日記『山窓功課』を除いては、彼の他のいかなる述作においてよりも最も多くこの文の中で但馬における自己の後半生を語っている。そして、なるほどここには自然の幽興に託した深い自得の境涯が示されている。〔松風洞記〕〔草菴文集〕中〕にもまた、草庵の日常とともに、その深い自得の境涯が記されている。

ところで、成心なくこの「青谿書院記」を読む者は、果して次のような疑問が湧き上がるのを禁じ得ないのではないだろうか。すなわち、小壮の頃から夙に抱懐していた自己の「脱俗の想」（疑業余稿）に忠実に従って、後半生を青谿の地に埋もれさせるようにして生きた草庵とは、けつきよく人間の国の異邦人、自然を愛好する単なる隱逸者流に他ならないのではないか。これ草庵が「当夏又古里之近所ニ山水景勝之地ヲ占メ、一草庵ヲ結び申候。未成就ハいたし不申候へ共、大略出来懸り申候。其ニテ終身読書、古之巖棲谷汲之士風ヲ效ひ可申と相樂申候」〔陽明書〕二十三頁、良齋宛書簡〕という所以である。草庵が、「青谿書院記」の中で、ともに『後漢書』隱逸伝にその伝を載せる嚴子陵、龐徳公の高踏の跡に深く思いを寄せているのは、その一徵証である、と。事態、かくのごとくであるとすれば、その優游自適の境涯がどれだけ深いものであっても、けつきよくは一面的な自得満足にすぎないのではないだろうか。

上來述べたごとく、草庵が青谿に居を下したのは、弘化丁未、草庵三十五歳のときである。このことと呼応するように、草庵は相当の決意をもって同年の正月より『山窓功課』（最初は『山房功課日録』、あるいは『山房功課』と称した）と称する実に丹念な日記を書き始めている。その巻頭に載せる次の文は、草庵が『山窓功課』を記すに至った根本動機を語っている。すなわち、

歳且偶たま念う、戊戌ぼじゅうの歳暮、感懐の詩を賦して云う、「光陰石火 虚語に非ず、二十六年 夢の裏うらに過ぐ。結髮して師を尋ぬるも 今は壮大、悠々たる講習 竟に何をか為さん」と。今日此の詩を回看するに又た已に十年なり。而して「悠々たる講習竟に何をか為さん」という者、今猶お吾のごとし。毎々此くの如くんば、則ち此の生將た何を以て吾が業を為さんや。沈黙熟思して、覺えず慨然たり。因りて今日より以後、日々功課の勤惰を録して以て自

ら考えん。則ち是れに因りて惕励すれば、自ら廢墜するに至らざらん。『山房功課日録』(巻)

「戊戌」は天保九年(一八三八)、草庵二十六歳。上掲の詩は「戊戌歳暮感懷」という題で『草庵詩集』に収録されている。なお、上掲の文については、かつて別の小論において「反復」という概念を手がかりにしてその意義を論じたので、ここでは繰り返さない。二十六歳といえは、草庵はいまだ洛西松尾山麓の草庵に窮居してその志を求めている時期である。その生活は「邑人の吾が志を憐れむ者、衣食を以て我に給す。我因りて以て苟くも自足するを得たり」(『草庵文集』上、西山草庵記)、「夫れ其の未だ成らざるに及んでや、苦を攻め淡を食ひ、固究力学、又た何ぞ吾人の今日に異ならんや」(同上、西山寓居記)というごとく、世俗的榮利に超然として、清貧に甘んじた求道の生活の日々であった。それにもかかわらず、そのような自己の生を取り来たつて「悠々たる講習竟に何をか何さん」と一刀兩断している。そして十年後の弘化四年(一八四七)の歳旦。ところで、この十年間は、草庵の生涯の中でもとりわけ起伏に富んだ歳月であった。本領の確立が成つた草庵は、天保十一年八月には「堅坐六年」した松尾の草庵を出て、京都一条坊に私塾を開いた。その三年後の同十四年六月には、十数年の京都遊学に終止符を打つて但馬に歸つた。帰郷後は青谿書院に居を移すまでの三年間、近隣の八鹿村西村潜蔵の立誠舎を借り受けて子弟に教授した。なお、弘化二年八月には、「名賢の蘊蔵を叩き、独学固陋の弊を医す」(前出)目的で、愛甥の盛之助等を伴つて、賛岐の良齋、伊予の近藤篤山、備中の方谷、そして京都の潜庵を訪ねる長途の旅を敢行している。そして、この四国・中国の旅で良齋と締交し、爾後書簡を通じて論学したことは、曩に少しく触れたごとく草庵の学問を構成する上で決定的な出来事であった。このように、曲折に富んだこの十年間は、多くのものをもたらし、草庵の生涯においてまことに実り豊かな時期であつたといつてよい。それにもかかわらず、その後の十年間を取り来たつて草庵は、同様に「悠々たる講習竟に何をか何さん」という者、今猶お吾のごとし」といつて、いささかの仮借もない厳しい筆致で自己を批判している。

ところで、既に「青谿書院記」に叙せられているような深い自得の境涯に自ら安んずる草庵が、自己の日常を取り来たつて「而して「悠々たる講習竟に何をか為さん」という者、今猶お吾のごとし。毎々此くの如くんば、則ち此の

生將た何を以て吾が業を為さんや。沈黙熟思して、覺えず慨然たり。因りて今日より以後、日々功課の勤惰を録して以て自ら考えん。則ち是れに因りて惕励すれば、自ら靡墜するに至らざらん」といつて、自己を策励するというのは、ある意味において矛盾なのではないだろうか。もつとも、『青谿書院記』それ自体は、『山窓功課』の序文より更に凡そ十年後れて書かれている（『青谿書院記』が成つたのは安政四年（一八五七）、草庵四十五歳）から、その十年間に草庵の心境が一段と深まったのだと一応解せなくてはならない。しかし、かかる解釈は、けつきよく草庵の生の真実に迫るものではない。むしろ、それは事態の真実に即した矛盾であるといわなければならない。この矛盾こそは、草庵の境涯がかの人間の国の異邦人、自然を愛好する林下の高士の自得とは異なつて、決して表裏なき一面の自得満足でなかつたことを示すといわなくてはならない。

劉念台は明儒では最も呉康斎に私淑して、その史的意義を表章した人。彼は「先生の学は、刻苦奮励、多く五更枕上の汗流れ涙下るより得來たる。夫の之を得て以て自ら樂しむ有るに及びては、則ち足の之を踏み、手の之を舞うを知らず。蓋し七十年一日の如く、憤樂相生じ、独り聖賢の心精を得たる者と謂うべし」（『明儒学案』師説）といつて、康斎の学に対して並々ならぬ理解を示している。念台が康斎の学を評した「發憤と怡樂とこもこも生まれるといふ風で」（憤樂相生）という消息は、かの訥庵をして「康斎の流亜」（『朱子書』一〇八頁）と言わしめた草庵の場合にもそのまま当てはまるといつてよい。事実、『山窓功課』の序文と同趣の内容を記した良翁宛の書簡には、「元來先年兼仏帰儒之初ハ此様之二者終り候心得ニハ無之ニ、一向精進出來不_レ申、此生実ニ辜_二負丈夫出世_一一番と憤發、二不_レ堪候」（『陽明書』三三頁）という表現が見出される。また、「老之將_レ至ヲ忘_レテ只々邁進之念ヲカク憤發交_レ至、直ニ此生ヲ断送イタシ候事ニ御坐候事也」（『朱子書』二四八頁、碩水宛書簡）という酷似した表現もある（もつとも、私は念台が康斎を形容するのに用いた「憤樂相生」と類似した表現が、草庵の文中から一、二見出されるからといって、そのことを根拠にして直ちに康斎の生と草庵のそれとの同質性を主張しようとしていたのではない。われわれは訥庵が草庵の人となり形容するのに「康斎の流亜」をもつてしたことの内面的な意味を、紙背に徹して理解しなければならぬ）。既に康斎の生がそうであつたように、草庵の生にもまた自得安心（『青谿書院記』、あるいは「松風洞記」

を見よ」とかかる境位に容易に安んずることを肯ぜぬ反省克己とが相互に矛盾し合い、同時に絡まり合つて、互いにそのポテンツを高め激成するような趣が感得される。「警省惕厲、痛無くして痛を生じ、毛髮竦動して、以て吾の情を振う」、あるいは「赧然として愧怍し、心身を置くに地無かるべし」という真摯な自省の表現などは、かかる生の脈絡、生のダイナミックスの中に定位することによって、始めてその真の意味を開示するのではないだろうか。「復東崇一書」を読んだ端山が、そして沢瀉が一様に深い感銘を覚えたことを告白しているのも、この書簡がかくのごとく草庵の生のダイナミックスの全体呈露したものであるところに負っている。

徳川封建制下において、思想的覇権を握り、その後も終始正統教学としての地位を占めてきたのは、周知のように朱子学であった。それとは対蹠的に、わが国では陽明学を奉ずる学者は散発的に出現したに止どまり、その影響するところも実社会に一大運動を起こすまでには至らなかった。私は朱子学・陽明学を受容した江戸時代の学者達が、それぞれ自己の奉ずる学問に導かれて自ら靖んずるいかなる境地に到達したかを知らない。また、一口に江戸時代といっても、江戸時代前期の藤原惺窩（二五六一〜一六一九）、林羅山（二五八三〜一六五七）、あるいは日本陽明学の開祖中江藤樹（一六〇八〜一六四八）と、江戸時代末期の新朱王学者との間には、二〇〇年余りの時間的隔たりがあつて、彼等が身を処した時代の環境も、また彼等が懐いていた問題や時代の課題も、それぞれ異なっている。碩水はその語録『随得録』四において、次のように述べている。

羅近溪は顔山農を以て聖人と為し、楊復所は羅近溪を以て聖人と為し、李卓吾は何心隠を以て聖人と為す。吾が邦、中江藤樹に近江聖人の称有り、三浦梅園に豊後聖人の称有り、紀平洲に尾張聖人の称有り、近藤篤山に伊予聖人の称有り。何ぞ聖人の多きや。〔碩水遺書〕十二

碩水の文はこれで全文なので、これだけでは彼の意図するところが那邊に存するのか、十分に明らかであるとはいいがたい。「羅近溪は顔山農を以て聖人と為し云々」は、顧憲成の記すところ『小心齋劄記』四。泰州学派の顔山農一派がその師友を聖人と見なしたことの意義は、碩水がわが国において中江藤樹に「近江聖人」^④の称が、三浦梅園に「豊後聖人」の称が、紀平洲に「尾張聖人」の称が、近藤篤山に「伊予聖人」の称がそれぞれあるというのとは、単

純に同じではない。が、ここではそのことが直接問題なのではない。むしろ、ここではわが国の著名な儒者の幾人かに「〇〇聖人」の呼称があることに注目しよう。ところで、草庵にも「但馬聖人」の称がある。そして、「但馬聖人」の名を世に知らしめるのに与つて力があつたのは、何といつても豊田小八郎氏の『但馬聖人』（明治四〇年刊）であろう。この書は、草庵の没後二十年を経て、草庵の遺響なお存する「青谿書院を訪ふこと前後十数回、先生の旧知ありと聞けば道の遠き勞の多きを厭はずして往きて尋ねざるなく、百方意を用ひて材料を収集して」（田中勝之丞氏の跋文）ついに成つた労作である。豊田氏が自著に題するに「但馬聖人」をもつてした理由が那边に存するの、氏はこのことについて直接には答えていないように私には思われる。草庵の門人北垣晋太郎（国道）は「但馬聖人の巻首に題す」において、その間の消息を「国道未だ聖人を見ずと雖も、窃に惟ふに、孔子釈氏（ブツダ）耶子（イエス）の如きは、実に人間最上の人なり。故に其徳沢万世に朽ちず。先生も亦人間最上の人なり。豊田氏本書に題すに但馬聖人を以てす、亦宜なる哉」と述べている。この言などは草庵の「頌徳表」を作るのでなければ、草庵を儒教・仏教・キリスト教（儒教を除いて、仏教・キリスト教は人類に汎通なる宗教＝世界宗教である）など、その宗教を開いた個人の特異な人格に比擬しようとする神聖視、ひいては人格化への道筋である。しかし、草庵の門人ではない私にはそのような聖人観は余り興味がない。私は曩に草庵の生には自得安心と反省克己とが相互に矛盾し否定し合い、同時に絡まり合つて、互いにそのポテンツを高め激成するような趣が感得されると言つた。そして私は、草庵において徳川時代前期の中世的な聖人の伝統（このような表現が、極めて恣意的な学問的な厳密さに堪え得ないものであることは、よく承知している）と訣別した、幕末という危機の時代に投げ出されることを余儀なくされた前近代の人間の苦悩に充ちた学問の在り方の一つの真摯な姿が見られると思う（なお、小論では単に問題の指摘に止どまらざるを得なかつたが、草庵についてかかる象面を解析することは、現代における草庵の有する意義、あるいはその可能性を開鑿することになるであろう）。

既に見来たつたごとく、「復東崇一書」を読んだ端山は、「亦た以て其の得力の一斑を窺うべし。胸懷脱洒、真の君子人なり」と、草庵の人となりに対して満腔の称賛を惜しもうとしない。また、草庵の懇切をきわめた同書簡を受取つた当の沢瀉は、「就而ハ先生御情懷之義、御漢牘ニ而小子之御復書被_レ賦、誠ニ千万難_レ有奉_レ存候。大ニ昏惰之氣ヲ奮興仕候様覚候」と、奮興を覚えたことを率直に告白している。このように、「復東崇一書」が彼等に与える深い感銘は、三十年來の旧知潜庵に対する草庵の満腔の同苦の念と自己に対する警策を基調とする生のダイナミックスに由来しているところが多い。楠本正継博士の「中国の思想は人格の表現である時、最もよくその力を感じしめる」(『宋明時代儒学思想の研究』)という指摘は、この場合もよく妥当するであろう。曩に少しく触れたごとく、端山が草庵を評した「胸懷脱洒」という表現は、黄山谷がその「濂溪詩序」において周濂溪の人品を把らえ来たつて「胸中灑落にして、光風霽月の如し」(胸中灑落、如光風霽月)と評した周知の表現を直ちに連想させる。そして、「灑落の両字は、本と是れ黄太史の語。後來延平先生拈出す」(『朱子文集』五三、答胡季随)というごとく、この一句は後に朱子の師李延平によつて、有道者の氣象を形容するという、新しい局面を開示する言葉として深い意味が見出された。すなわち、

嘗て愛す、黄魯直(山谷の字)濂溪詩序を作りて云う、春_{しつりょう}陵の周茂叔、人品甚だ高く、胸中洒落にして、光風霽月の如しと。此の句有道者の氣象を形容して絶だ佳し。胸中洒落なれば、即ち作為尽く洒落たり。学者の此に至ること甚だ遠しと雖も、亦た常に此の体段を存して胸中に在らしめざるべからず。事に遇いて廓然として、道理に於いて方に少進あるに庶幾からん。願わくは更に存養すること此くの如くせんことを。(『延平答問』)

延平の書簡には、彼が山谷の濂溪に対する評語「胸中洒落、如光風霽月」という表現を通じて、濂溪の人格、その思想に深い敬慕と情と、並々ならぬ理解とを寄せていることが、了々と観て取れるであろう。それは存在の共感ともいふべき濂溪に対する生の同質感に満ちている(なお、朱子は後に『太極図解』・『太極図説解』・『通書解』等を著して

濂溪思想の宋学史における史的意義を明らかにしているが、その濂溪理解は延平に負うところが多い。ここで延平のいわゆる「洒落」がいかなる事態を表わしているかということに、直接答えることはできないが、ともあれ洒落の両字が、学者（この言葉は宋人の人間類型を最も端的に表している）の目指すべき究竟の境地を表わしていることは疑い得ない。この場合、佐藤仁先生のそのすぐれた延平論が理解の導きとなるであろう。

一言にしていえば、洒落とは中国の数多くの思想家哲人たちが究極の目的とした自然とか無とかいわれている境地の人格的表現であった。但し儒教徒延平のいう洒落とは、自然であり、無的ではあるが、この現実の人間と離れない倫理的主体、換言すれば、天理とか天徳とか、或はまた仁とか誠とかいわれているものに帰一した人間の胸懐にのみ許されるものであった。（『九州中国学会報』第四巻）

以上、濂溪の気象を形容した「洒落」の両字をめぐる瞥見したが、端山が草庵を評するに「胸懐脱洒」の一句をもつてしたとき、恐らく上來述べた思想的脈絡を押さえていたことは争えない。ところで、端山が「胸懐脱洒」の一句をもつて草庵の人となり形容したことは、故なしとしない。例えば弟の碩水は万延元年（一八六〇）四月、江戸遊学の帰途、但馬に草庵を訪問しているが、後に「草菴ハサツパリトシテムツカシイ風モナク、俗気ガ少イゾ。山人隠士ノ風ガアツタゾ」（『過庭余聞』）とその人となりを回想している。「碩水の「サツパリトシテムツカシイ風モナク、俗気ガ少イ」という表現は、明らかに端山の「胸懐脱洒」の一句の注解としての地位を担っている。また、「山人隠士ノ風」という表現も、濂溪の風貌を髣髴させる。山谷は濂溪の気象を形容した上記「胸中洒落、如光風霽月」の後に続けて、「好んで書を読む。雅より林壑りんかくに意有り、初めより人に窘束せられず。名を取るに短くして、志を求むるに楽しむ。福を徼もとむるに薄くして、民を得るに厚し。身を奉ずるに菲ひくして、燕婢ひげに及ぶ。世に希うに陋ろうにして、千古を尚友す」（『周子全書』七）と、その生のあらましを叙している。濂溪の生涯とはいかにもさもあつたろうと思ふ（もつとも、このように言ったからといって、濂溪を直ちに人間の国の異邦人―斯の人と与に住む世を避ける隱逸者流と観ずるのは正しくない）。

わけても、碩水のそれは数日間但馬の青谿書院に在って、自らの眼で肯ったところのものであった。碩水は但馬滯

在中、松風洞に滞在した。碩水のいうところによれば、草庵は午後になると必ずここにやって来て、夜は鶏鳴までも碩水と妮々として語り合った。そして、その時草庵から『大学』の話を聴いたので筆記したという。また、碩水の希望で、彼は諸生とともに草庵の講釈を聴いている。碩水が青谿書院を辞して十丁ばかり来たとき、諸生が二人追いかけてきて、一本の扇子を手渡した。その扇面には「我と子と俱に是れ各おの天の人。別れに臨んで悽然たり。果して是れ何の心ぞや」と書してあった。草庵は後に往時を回顧して「草庵ノ懇摯ナル感ニ堪ヘナンダゾ」（『過庭余聞』、「止だに契合の深きのみならず、其の余に期望する所、蓋し亦た浅からず」（『碩水遺書』六、書池田草庵俗牘巻後）と述懐している（以上の叙述は『過庭余聞』による）。また、碩水は帰郷後書簡を送り、草庵の許に滞在した数日間を印象の深い言葉で綴って、草庵に対して並々ならぬ敬慕の情を告白している。

孚嘉（碩水の名）之於先生ハ則不然。実ニ春風中ニ坐了スルト申者ニ而、自己之心脱然トして一点之俗氣無之様相覚、先生之所薰陶不_レ少。其故學術之異同は姑舍_{不_レ}論、近來別而不_レ堪_レ瞻仰也。（『朱子書』一九九頁）

文中の「実ニ春風中ニ坐了スルト申者」というのは、明らかに碩水が草庵とともにあった但馬滞在中の数日間を指すものでなければならぬ。また、碩水は草庵に次の一詩を奉呈している。その詩意から、同様に碩水が但馬滞在中に自らの眼で肯った草庵の印象を詠んだものである。松風洞は書斎の機能を併せもった草庵の「遊息の処」であるとともに、遠来の客の滞留する処であった。そして、碩水もまた楼外の林樹の間を蕭々颯々として吹きわたる天籟を確かに聞いている。

紅塵を脱却して 逸民と喚ぶ、風手は是れ世儒の倫にあらず。素心孤立 堅きこと石の如し、和氣一団 温なること春に似たり。楼外の松音 道妙を伝う、庭前の草色 天真を現す。端無くも想起す 劉夫子、復た山陰に向いて此の人を見る。（『魏_漢朱子学者書翰集』一）

「春風中ニ坐了スル」は、ここでは「和氣一団温なること春に似たり」と言い換えられて、結局同じ事態を指し示している。劉夫子は念台のこと。碩水が但馬滞在中に草庵から『大学』の話聴いたことは既に指摘した。それは後年『古本大学略解』（明治五年刊）として結晶する原型だと思われるが、草庵の大学説は念台の誠意説に基づいて成った

もの。念台の名を挙げたのは、草庵の念台に対する深い私淑の念を目の当たりにしたからであろう。「春風中ニ坐了スル」といい、「一団の和氣」といい、硬い石に彫りつけたような印象の深いこの言葉は、周知のように宋儒明道の氣象を形容したもので、程門の謝上蔡・朱公掞・游定夫諸人が明道に接したときの経験として語っている（なお、碩水が草庵とともに在った数日間を把り来たって「春風中ニ坐了スル」と評した意義については、拙稿「池田草庵 康齋の流亜——（上）」を参照されたい）。端山の「胸懷脱洒」といい、また、碩水の「春風中ニ坐了スル」といい、いみじくも草庵の上に冠せられた表現には（もつとも、この二つの表現はともに端山・碩水の独創に係るものではない）かく言ったからといって、このことは直接貶評を意味するものではない）、ともに良質の思索と良質の詩作の不可分な結合より成っているその言語表現の重みのある美しさがある。そして、そのような表現にして始めて把らえ得る生の真実に満ちている。この二つの表現は、汎中国的世界における思想というものの性格、あるいは思想というものの汎中国的な性格を象徴的に語っていると思う。思想というものが、文字という符号によって機械的に紙の上に固着せられたものとは異なつて、文字通り肉体を纏つて、現に語っている者として「今——此処」に現成しているという含蓄がそこにはある。¹⁴

私は端山が草庵を評した「胸中脱洒」という表現に導かれて、汎中国的世界における思想というものの性格という問題に逢着したが、単に問題の指摘に止どまらざるを得なかった。このような問題は目下の私の能力を超えるもので、それについて主題的に論ずることは困難である。今後の課題としていきたい。

附記 小論は平成十六年十一月に九州大学文学部で開催された第二二三回中哲懇話会において口頭発表したものの一部である。

〔注〕

（一）都城工業高等専門学校『研究報告』第三九号所収。

(2) 沢瀉の草庵宛書簡(『陽明書』四七一頁)によれば、草庵はその依頼に応えて潜庵の書簡一紙を沢瀉に贈る約束をしている。良斎の書簡は、今は亡き愛甥池田盛之助が草庵自身の俗牘と合綴して編集しているため、割愛するのは難しいと断っている。沢瀉はそれに「御尤之御義奉_レ存候」と答え、続けて「何卒活字版ニナリと御上木被_レ成候得ハ学者ノ益と相成、小子輩込賜_レ受可_レ申候。何卒御思立有_レ之候而ハ如何」(同上、四七一頁)と述べて、盛之助手定の良斎・草庵の往復書簡集の出版を切望している。ここで沢瀉が「林先生之書、盛之助君、先生之御俗牘と二所ニ御編被_レ成置」といつているのは、明らかに今陽明学大系第十一卷『辨陽明学者書簡集』に収録する「林良斎・池田草庵往復書簡」を指すのでなくてはならない。沢瀉が上木を切望した同書簡集は、その後実に九〇年の歳月を経て実現せられたことになる。なお、『辨陽明学者書簡集』の凡例によると、「林良斎・池田草庵往復書簡」は、楠本家所蔵の篠田時行の写しをもとにしている。篠田時行は楠本門下の平戸藩士、かつて但馬の草庵の許に遊学している。

(3) 沢瀉にその名も「自明軒遺稿を読む」という一文がある。それを読むと、良斎とは幽明を異にしながら、なお沢瀉が仄々たる敬慕の情を寄せていて、彼が「純、此先生(潜庵を指す)と林良斎先生へ拜謁不_レ仕候事、誠終身之遺憾ニ御座候」(『陽明書』四六三頁)という言が、率爾に発せられたものでないことが伺われる。

憶う、昔舟を多度津に泊む。同載は皆な農工商賈の人。蓬窓の間独り獅山・象頭諸山を眺望して、情懷を慰むるのみ。今茲池田翁『自明軒遺稿』なる者を寄す。即ち多度津林先生の著す所なり。蓋し其の学、良知を以て宗と為し、寿夭貳わずを以て実修の地と為す。精勵刻苦、之を古人に求めてすら、且つ多く有らざる所なり。夫れ情の感ずる所、世を隔つと雖も、猶お相逢わんと欲す。況んや世に並んで其の道と同じうするをや。羅念菴、伝習録を読み、陽明に見えざるを以て終天の恨みと為す。則ち予の恨みと為す如何んや。獅山眺むべし、象頭望むべし。而して先生に復た見ゆべからず。翁に非ずんば其れ誰か我が心を允_レわんや。(『王学雜誌』第壹卷第拾壹号所収)

(4) 一念微かに萌す処、言うを休めよ物の窺う莫しと。此の身は硝子に似たり、肺肝万人知る。(『自明軒遺稿』詩、偶成)

(5) 例えば幕末の崎門学派の月田蒙斎は、最も居敬存養の功夫に重心を置いて静坐体認に努めた朱子学者であるが、彼は静坐を定義してこう言っている。「静坐とは、身の主静を習いて、以て心の主静を求むる所以の道なり」(『蒙斎隨筆』一)

(6) 『林良齋全集』が刊行されたことは曩に指摘した。同全集の構成はⅠ 自明軒遺稿、Ⅱ 林良齋・池田草菴往復書翰集、Ⅲ 書序跋記、Ⅳ 四書注釈、Ⅴ 編纂書、Ⅵ 箚記詩文他の六章から成っている。そのうちⅣ 四書注釈が全体の二分の一の量を占め、Ⅴ 編纂書を合わせると全体の四分の三の量に上り、このことが右全集の一の特色を成している。以上の事實は、良齋が經典の注釈という広汎な叙述を不可避に伴う形で自己の思想を記述していることを意味しないであろうか。事態かくの通りであるとすれば、上來述べ来たった結論を裏切るものではないだろうか。

もつとも、良齋の「僕幼より書を読むを好む。然れども但だ行を尋ね墨を数うるのみ。年殆んど三十にして、始めて其の心身に益無きことを悔い、因りて諸書を併去して、専ら諸を四書に求む」(『自明軒遺稿』与吉村秋陽書)という言に徴すると、良齋が諸書を一切捨てて四書へと向かったのは、従前の記誦辞章の学に伴う博覧の弊を痛感して専ら心身の学を志向する自覚とパラレルである。かく見来たれば、単純に良齋の四書注釈を取り来たつて、經典の注釈という広汎な叙述を伴う形で自己の思想が記述せられているとはいいがたくなる。ともあれ、私は良齋の著述において見られる一の特色として、經典の注釈という形で、広汎な叙述として自己の思想が記述せられているという事実と、他方においては宗教的実存が本来要求している簡潔性と主体的集約が実現されていて(例えば『自明軒遺稿』を見よ)、互いに背馳し合う二つの性格が、良齋という人格において一の不思議な融合を保っていることを指摘しておこう。

(7) 盛之助は嘉永二年(一八四九)二月より一ヶ月の間、多度津の良齋の許に従学して、弘浜書院において良齋から直接薫陶を受けるという機会をもった。良齋は同年の五月四日に死去するから、盛之助は文字通り良齋晩年の講筵に列したことになる。なお、独特の深みを湛えた良齋晩年の講学の模様は、彼の手録『己酉日記』に詳しい。盛之助はその手録の中で、良齋の学を繰り返して「親切」の二字で形容している。すなわち、

九ツ半頃に林先生来訪、静坐の功を御吐し有^{はな}之、且極て堅苦を忍ばずんばあるべからざることを御吐し有^{はな}之。今日の学者は、只是欲^レ上人之一念耳。此念を取除て別に目当てる所ありや否云々。至て親切也。(二月十日)

閨門の中、衽席上、是独中之独、屋漏中之屋漏、吾人第一歩。吾人常ニ此一步ヲ捨テ、第二歩ヨリ功夫ヲ著ク。丁ト空ニ物ヲ架スル如シ。用力勞シ、功少キ所以也。第一歩ヨリ力ヲ可^レ用云々。吾平生此一関ニ誠ニ苦シム。若夫未^レ読^レ書多シ

ト雖、左マテ苦ニモ不レ思。追々読ムベシ。此一段着力ノ処、ドウモ確ト取定ノナキユエ、但子敬(草庵の字)ニ一面、相談晤致シ度旨、種々親切ノ御吐有レ之。(三月四日)

(8) 草庵の日記には、凡そ三十七日間を要したその行の目的が何であつたかが、簡潔に記されている。すなわち、「此の日午後発足す。高木生を拉し、大坂に赴きて季弟(池田和助)の病を問う。又た泉州岸和田相馬氏、又た京に入りて潜庵の動靜を聞く。前後凡そ三十七日。九月廿六日に至りて始めて帰院す。『山窓功課』十、文久一年八月十九日)

(9) 左にあげた文は、慶応二年(一八六六)七月、藩用で上京した碩水が、「春日先生も当節は少しも嫌疑はなくなり、旧知の人へは面会をされる趣なので、お手すきの折にはご一遊されませんか」と、草庵に上京を勧めたのに対する回答である。

ある意味において、この文などは草庵の時勢に処する態度を最もままとまつた形で表明したものであるといつてもよい。ここにもまた「うまく隠れていた者こそ、いい生き方をした者だ」という諺言を髣髴とさせる、草庵の危機の時代に処する生き方がある。ところで、この西洋の諺言は外部からの干渉を受けつけず、社会に対して非常に消極的な態度・関わり方を表すと解せられるのが普通であるが、その内面に立入つて理解するならば、反つて非常にラディカルな精神の態度を表していると考えることができなくもない。草庵―あるいはその他の幕末期の新朱王学者のいく人かの時勢に処する態度は、かかる理解を可能とする象面をもっている。

拙生事此節京師一遊ノ事御催促被レ下辱奉レ存候。只当年廟堂之士、和議攘斥議論不レ一、紛々異同有レ之候より、何とナク諸藩士草莽之徒ニ至ル迄各其党ヲ結び、所謂正義之派杯申者出来、過激之所作杯拳動いたし、意外ニ嫌疑ヲ受ケ横禍ニ罹リ候類も有レ之、可レ恐事ニ奉レ存候。畢竟天下攘夷ト力、又ハ頓と通商とか、国論一定いたし候迄ハ、善ニアレ悪ニアレ意外之虞も不レ少、可レ慎と奉レ存候。既ニ先年当国生野之変杯可レ鑒也。且又学者も一向仕官ニテもいたし身分之相定まり居候者ハ子細無レ之、只吾輩ノ如クブラ／＼いたし候者、彼ノ徒平生ノ挙動ヲ相伺ひ、何とか世之評論ヲ不レ被レ免困入候事ニ御座候。其外近来ハ只々彼是斂迹、出山一步スル事サヘ憚リ申候。万一山ヲ出テ候テも、何とか事情明白ナラバ恐ル事ハナク、只漫然ト出テ候事ハ嫌疑之為メ不レ可レ慎也。平生小分之学問ニテモ往々世間ニシラレ虚名ヲ得テ却而実禍ヲ買ひ候様之事ニ相成リ申テハと相慎居申事也。ソレ故近来ハ近クテモ頓と京坂迄も出かけ得不レ申、殊ニ近日之形勢ヲ默

觀スルニ、目今平隱ノ様ナレトモ天下治乱ノ機実ハ不_レ可_レ測。矢張依_レ旧彼是全身之手段と存極メ申候。吾輩一議論一舉動モ漏洩ヲ憚リ可_レ申事ニ御座候。ソレ故潜菴ナゾへ通信ハ彼ノ為メモアシク自己之為メモアシク、何カラ禍機ヲ引出スベキモノ不_レ可_レ量と存居候事。其故強テ当方ヨリモ通信ヲ求メ不_レ申候。実ニ交友零落、孤立之勢ひ、困り候者ニ御座候。御憐察可_レ被_レ下候。『朱子書』二八二頁〜二八三頁

(10) また、草庵は潜庵が幽閉中に書した「雲深处」の三字を自室に掲げて、時を避け窮山に蟻屈_{（なぐく）}して岑寂_{（しん）}落莫中のわが志を養うよすがとしている。

「雲深处」の三字、此れは是れ予の友潜庵、身曾て幽閉中に在りて作る所なり。蓋し以て其の事を書し、其の志を寓するなり。予、今之を室に掲げる者は、亦た將に時を避け跡を遁れて吾が志を養わんとするなり。『肄業余稿』

なお、潜庵がその志を寓したという「雲深处」の三字に因んで、草庵は次の詩を残している。

雲深きの処 雲深き処、我此中_{（こゝ）}に向いて長く関を閉ざす。隱憂を把りて我が意を撓_{（な）}るを休めよ、溪頭 耳を洗つて潺湲_{（せんげん）}を聴く。『草菴詩集』雪深处

(11) 土屋鳳洲はその「草庵池田先生行状」において、江戸に檻送され岸和田藩邸に拘禁せられた潜庵の境遇を、草庵がかの王陽明が反劉瑾運動に連座して貴州省竜場に流謫せられた体験に擬していることを伝えている。陽明の竜場での体験が、陽明学成立のエポックを画したことを考えると、草庵の潜庵に寄せる期待の大きかったことが伺えるであろう。なお、鳳洲は間接的に潜庵拘禁の報を草庵に伝達せしめた当事者、また、当時但馬の草庵の許にあつて、潜庵拘禁の報に接した草庵の心事を最も具さに知り得る立場にあつたことを考えると、彼の言は時代の証言としての地位を担っている。

安政戊午（五年）の春、余年十九、笈を負いて先生に青溪の浜に事える。此の年の秋幕吏大いに鉤覚の獄を興し、吉田松陰、頼三樹、梅田雲浜等、逮捕せらる。而して潜庵も亦た岸和田藩主岡部侯江戸邸に拘せらる。此の時九方翁、箠仕して岸和田に在り。手書もて潜庵の事を報じ、並びに函もて其の狂に在るの状を图示す。先生取りて之を觀、悽然たること响刻。已にして弘（鳳洲の名）に謂いて曰く、「潜庵の今日の厄は、猶お王子の竜場に謫せらるるがごとし。用功実地、発明超悟、必ず平昔に倍する者有らん。吾も亦た此の函を以て、古人の面晤に充て、奮励興起、益ます進修を圖らんと欲す」

と。遂に図後に題するに数語を以てして、常に之を座右に置く。〔但馬聖人〕所収)

(12) もっとも、草庵の潜庵に対する評価は決して単純ではない。草庵は潜庵について、その英邁な気象は類い稀れであるとながらも、その人品学術については意に満たないところがあつたらしく、潜庵を世のいわゆる清議が囂々としてその剛愎独裁を非難した北宋の王安石などの弊に陥りやすいと評している。中略箇所の原文は以下のごとくである。

只圭角多く自信ニ過クル処有_レ之、因而何トナクツメテ申セバ王荊公アタリノ蔽ニ陥リ候処有_レ之。万一天下之大事ニアタリ候ハ、可_レ慮と奉_レ存候。幸ひに水辺林下ニ修身講学いたし候ハ、蔽処ヲ見ズ、只臨_レ事候ハ、如何哉ト奉_レ存候。併シ右様之話ハ只賢兄ト申込テ他人ニ洩スベキ事ニアラズ。此意御含ミ置可_レ被_レ下候。自負ニ過キ人之己レニ倭スルヲ喜ひ、因テ下情塞カリヤスク、所謂敗_ニ於所_ニ待ト申氣味ヲ免レ不_レ申。〔朱子書〕二八一頁〜二八二頁、碩水宛書簡)

(13) もっとも、碩水は藤樹は王学を主張したが、その学は窮理に務めず、心地の功夫も大本が明らかでないために、日常の具体相に現象したものは道の影響にすぎないといつて、碩水の藤樹学に対する評価は高いものではない。従つて、藤樹に「近江聖人」の称があることについて、それは斉東野人の過賞の言葉にすぎず、深く論ずるには足りないといつている。〔碩水遺書〕六、書明徳図説軸後)

(14) なお、次のような話柄もまた、その露出した生地そのものにおいては同様の事態を指すもので、私には大変興味深い。学問の上では西田哲学の批判者として終始するという運命をもつた高橋里美博士は、あるエッセイの中で、昭和十一年に仙台の東北大学で哲学の講演をした西田幾多郎博士の風貌を次のように述べている。

「講壇に、瘦軀を運ばれた先生の風貌は、誰かの批評したように、形而上学そのものがそこに立っているようで、まだ口を開かれない前から、それだけですでに聴衆に深い感銘を与えるものがあつた。やがて講義を始められた先生は壇の上を端から端へと往復して、考えにふけりながら徐るに、先生の哲学の片鱗を話されたのである。〔高橋里美全集〕七)